

11回 環境問題と社会運動／環境問題に関する社会運動の今日的課題について学ぶ。

生物多様性に関する問題

地球上には、知られているだけで約 175 万種、未知のものを含めると 3,000 万種とも言われる生物が生息している。これを「**種の多様性** (=いろいろな生きものがいること)」と言う。

また、生物が暮らす環境は、森林や草原、砂漠、河川やサンゴ礁などと様々である。すべての生きものは、約 40 億年もの進化の過程でこれらの環境に適応する生態系を作り上げた。この「**生態系の多様性** (=さまざまな環境があること)」も、生物多様性の一面である。

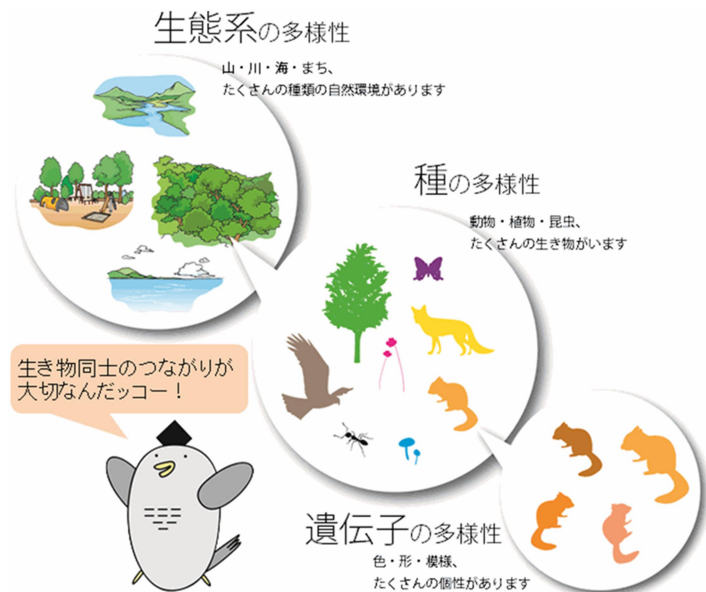
さらに、様々な環境変化に対応するためには、乾燥に強い、暑さに強い、病気に強いなど、さまざまな個性をもつ個体が存在する必要がある。そのため、同じ種であっても個体間で、また、生息する地域によって体の形や行動などの特徴に少しずつ違いがある。この「**遺伝子の多様性** (=それぞれの種の中でも個体差があること)」も、忘れてはならない生物多様性の一面である。

現在、開発や過剰な利用(乱獲)、外来種の持ち込みなどの社会活動によって、生物多様性が危機にさらされている。これまでのおよそ 1,000 倍の速度で生物が絶滅しているともいわれている。

国の策定した「**生物多様性国家戦略**」では、日本における生物多様性の危機の要因を 4 つ挙げている。

- 第 1 の原因 : **開発や過剰な利用** (乱獲) などです。たとえば、里地・里山の宅地化や干潟の埋め立てなどが挙げられる。
- 第 2 の原因 : **里地・里山における人間活動の縮小**です。まきや堆肥などをとるために人が入ることで維持されてきた里地・里山がその役割を失い、荒れてしまい、里地・里山の動植物が減少しつつある。
- 第 3 の原因 : **外来種の影響**である。本来そこにいなかった生きものが人の手で持ち込まれ、在来種を食べたり、餌やすみかを奪ったりするなど生態系に影響を与えている。さらに、農作物を食べたり、民家に侵入したりして問題になっている。

また、地球温暖化の問題も挙げられている。地球温暖化によって地球の気温が 1.5～2.5℃以上あがると、約 20～30%の動植物が絶滅するといわれている。このままでは、生物多様性に支えられている現代社会に影響が及ぶ可能性が高い。



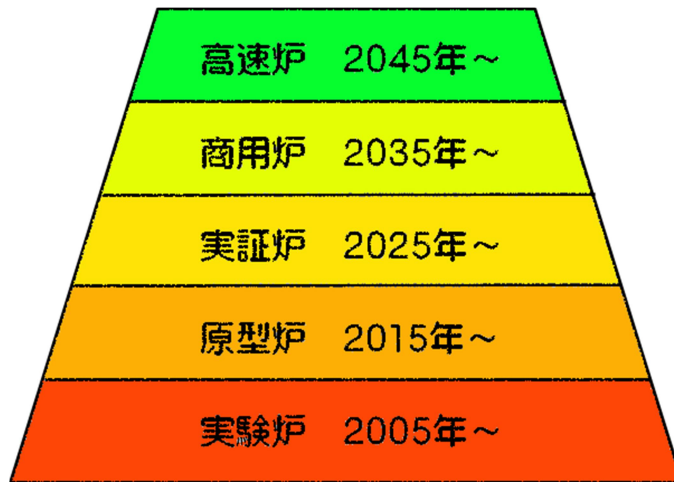
原子力エネルギーの問題 (1986-)

大衆高度消費社会を背景とする環境問題として、原子力エネルギー問題がある。

↑ 大衆高度消費社会を維持するためには大量のエネルギーが必要
 原子力エネルギーは、安価で少量のウランから大量のエネルギーを引き出すことができる。
 1960年代には将来のエネルギー源として国際的に大きな期待を集めていた。

(現在は二酸化炭素を排出しないエネルギー源としての期待も高い)

- ↑ しかし、制御の根本的な困難さ、“究極のゴミ”の放射性廃棄物の処理という問題、ウラン採掘から廃棄物管理にいたる全プロセスの放射能汚染の危険性と被害の深刻さ、放射性物質の半減期の長さ、軍事転用の危険、経済的・社会的リスクの大きさ等から、現在では日本やフランスなどをのぞいて、先進諸国では原子力離れが続いている
- ↑ 原子力の危険性とリスクの大きさを目の当たりにさせた事故
 - スリーマイル島原発事故 (1979年) チェルノブイリ原発事故 (1986年)
 - 福島第一原発事故 (2011年)



社会運動論は、公害反対運動、自然保護運動、反原発運動、町並み保存運動など実際の分析において、幅広く環境問題に関わってきている。その社会運動論が、環境そのものをテーマとする環境社会学とどのような接点があり、どう関連づけられるかを示すことが課題である。

現代に特有な環境問題とは何か、それに触発されながらアイデンティティ形成を行ってきた環境社会学とは何かを明らかにすることにより、その環境問題に対する諸アプローチの一つとして、環境社会学と社会運動論を位置づけることができる。

環境を“自然と人間の共生関係が一定範囲の地域の自然の循環のサイクルの中で保たれている状態”と規定し、その保全が地球規模で社会的に問題化したのが1980年代後半、その結果生じた環境問題を解明するのが環境社会学と捉えている。

環境問題への諸アプローチとしては、環境社会学では社会的物質循環論、生活環境主義、社会的ジェンマ論、地域共同管理論を、社会運動論では新しい社会運動論、資源動員論、ネットワーキング論が取り上げられる。

環境社会学 1

環境運動の特徴

長谷川公一 東北大学 教授

環境社会学 社会運動論

・社会運動を特徴づける4つの指標

- ①行為の主体 : 誰が運動をおこなっているのか
- ②イシュー(論点)の特性 : 問題となっているのは何か
- ③運動の価値志向性 : 何を実現しようとしているのか?何をめざしているのか
- ④行為様式 : どのようなスタイルの運動をおこなっているのか

①行為の主体

- ・ある環境問題によって実際に被害を受けている人たち: 住民、農漁業民、外部支援者も主体となる
- ・環境問題への関心が高い人たち: 専門職層や高学歴層に多くみられる
- ・女性が多くみられる傾向がある: 生活との密着性の高さ ←環境問題の多くは生活被害として現れる

②イシューの特性

- ・生活の場という消費点におけるイシューが争点となる
 - ↑ 工場という生産点におけるイシューを争点とする労働運動との違い
- ・リスク回避というイシュー: 環境破壊によって生み出されるリスクを避けることが目的
 - ↑ フェミニズム運動やマイノリティの運動のような権利獲得・回復型運動との違い

③運動の価値志向性

運動の価値志向性は、主体やイシューによって異なる。

例えば環境破壊によって直接被害を受けている住民の運動の場合は、**直接的な被害やリスクの除去**が目的となる。一方、環境破壊をもたらすような大量生産・大量消費というシステムの変革を求めたり、あるいはある特定の自然環境の保全を訴えたりするような運動の場合は、「環境に優しいシステムを構築すべき」とか「希少な動植物は守られるべき」という**“価値”の実現が目的**となる。

↑ 「環境を守る」こと自体が、実現されるべき価値を有している

④行為様式

環境運動は、環境破壊を行う企業や、企業に適切な規制をほどこしてこなかった行政への異議申し立てという側面が強いため、**告発・対決型運動という性格をおびやすい**。また、資源浪費的なライフスタイルの変更を要請するような**啓蒙型運動もおこりやすい**。

→このうち、〔①行為の主体〕に着目して分類される住民運動と市民運動の違いは重要
・・・誰が、誰／何のために運動をしているのか？